

有島武郎——△市場社会▽の中の作家

山 本 芳 明

はじめに

有島武郎の生涯を考えると、我々は、孤高の文学者としてイメージしがちであるが、実は彼がベストセラー作家であったことをどれほど認識しているだろうか。例えば、中学生の時、「有島ファン」であった瀬沼茂樹は、「出るもの出るものがベスト・セラーになった」状況を実見したことをふまえ、有島武郎を「一般大衆に愛せられていた人気作家である」と規定し、「僅かに六年位の間に十六冊も著作集を出し、どれも大部数売れたのは、この人気によるもので、大正出版史の一つの語り草である」『本の百年史——ベスト・セラーの今昔——』昭40・9刊と述べている。

無論、同時期に有島武郎著作集だけが売れていたのではない。第一次世界大戦後の不況の中で、文学出版を中心に、出版ビジネスそのものが、大変に好調だったのである。^① 大正九年に講談社が音羽に五〇万円で新社屋

を購入したこと、そして新潮社が資本金七〇万円で富士印刷株式会社を創立したことなどが、それを象徴している。また、ベストセラーも続々と生まれていた。有島に先立って、江馬修の『受難者』（大5・9刊）があり、有島に続いて、島田清次郎の『地上』第一～四部（大8・6～大11・1刊）、賀川豊彦の『死線を越えて』（大9・10刊）などが続々と出版されていた。当時の文学者たちは文学が急激に商品として価値を獲得していく場面に立ち会っていたのである。したがって、以下、明らかにしていくことは、有島だけに起こった特殊な出来事ではない。しかし、有島は、とりわけ理想主義的な作家像を抱いており、急激に展開する出版コマースリズムとの間に起こった軋轢は、恐らく、どの作家にもまして強烈なものだったと推察される。本稿で有島を対象とした理由はまさにそこにある。

また、当然ではあるが、こうした転換は日本だけに生じたわけではない。マイケル・T・ギルモアは、エマソン、ソロー、ホーソン、メルヴィルを対象としながら、「社会および文化の商業化という二つの発展過程がアメリカのロマン派に甚大な影響を及ぼし、彼らの芸術の主題や形態に決定的な影響力をもったということ」（片山厚十宮下雅年訳「序章」『アメリカのロマン派文学と市場社会』平7・8刊）を論じている。ギルモアによれば、一八一五年から南北戦争前後にかけて、「アメリカの文明と芸術は市場経済の広まりの結果急激かつ永久的に変貌し」、「人間およびその環境が交換の支配下に置かれ、作家と読者の関係も含めあらゆる取り引きが金銭取り引きに変わってしまった」△市場社会▽が成立したのである。

本稿は、アメリカ以上に急激に展開したと思われる△市場社会▽の中の作家の姿を、有島を視座として分析する試みである。そのために、まず、彼の著作集第一輯に掲げられた、読者へのメッセージから見ていきたい。こ

の文章は彼の作家としての出発点であり、生涯、理想とした作家活動のイメージが集約されているからである。

1

有島武郎著作集第一輯『死』（大6・10・18刊）には、次のような有島の△宣言▽が付されていた。

書冊の形でする私の創作感想の発表は、この「著作集」のみに依ることゝします。私の生活を投入するものはこの集の外にありません。

この集では、満足の出来るだけの斧鉞を加へて、先づ旧作から発表しますが、二度の勤をさせず、この集のみによつて、私の作物を公けにする時期の来る事を希望してゐます。

私のものを読んで下さる方がさう沢山あらうとは思はれません。私はその事を云ひました。新潮社は夫れにも係らず、この集の刊行を継続する事を約束してくれました。私は嬉しく思つてゐます。

とまれ私は一箇の人間でありたい。それを信じて下さい。あなたと私とを結付けた因縁に対して感謝する。而してあなたに私の最上の祈願を捧げる。この集を顧みて下さる方に私は敢てかう申します。 著 者

先ず、明らかにされているのは自分の「創作感想」が「生活」と一致しているという、この時期のパラダイム^②に忠実な言明である。そして、作品に「二度の勤をさせ」ないのを理想とすること、つまり、一つの作品

は一つの単行本の中にしか収めないということで、二重、三重に出版して利潤をあげる商業主義的な出版と一線を画した誠実さを主張している。第三の特徴は、売れないだろうし売れなくてもよいという発言で、第一、第二点とも関連しながら、自らと新潮社の出版の良心的なあり方を強調している。また、自分の作品が高尚であるが故に売れないはずだという暗黙の前提もある。同じような姿勢は、「嘗てない多作をした年」（『新潮』大6・12）でも繰り返されている。「私の作物はどう考へても広い需用を受け得べき性質のものではありません。来年あたりになつたら私の所謂評判も下火になると思つてゐます。その代り少数の読者は私を捨てない事を私は知つてゐます。私はその人達に向つて書きます。だから私はゆく／＼『武郎著作集』のみで私のものは発表したいと思つてゐます。数を売らなければならない商売雑誌に迷惑をかけない為めにはさうするのが一番いゝ事だと思つてゐますから」。

自分の読者を少数の熱心な読者としてイメージし、自分の「生活」の「投入」としての出版活動をコマースリズムから差異化し、自分の作品を金銭によって価値づけないことこそ、有島の△理想▽だった。その△理想▽は、大正七年になつて、新潮社から親友の足助素一の設立する叢文閣へ出版権が移行した事情を説明する時にも、発揮されている。

有島はこの変更に関わるビジネス上の問題^③にはふれず、あくまで「友誼的關係」として説明している。著作集第六輯『生れ出る悩み』（大7・9・12刊）には、新潮社社長佐藤義亮が、「足助と私との心事と誠実とを諒とし、色々の忍び難い事情を喜んで忍んで、今後のこの事業一切を足助の手に委ねてくれました。／私は茲にこの事業の授受が凡て商売氣を離れた友誼的關係を以て行はれた事を深く満足とするものです。この事を新潮

社の名譽の爲めに私は読者諸君にお告げする義務を感じます。」と述べていた。

ただし、売れなくともよいという発言の裏には、文学書の売れ行きが落ち込んでしまい、「初版一千部以上を刊行するものは稀で、一般的には七百部が限度」（『新潮社一〇〇年図書総目録』明治四四年の項）という明治末年以来の文学出版の状況があると思われる。また、大正五年、内田魯庵は「文人美術家の生活」（『太陽』大5・6）中で、「文人美術家」の経済的、文化的位置を次のように描いていた。「所謂原稿生活をなすものに到つては二六時中殆んど休みなく営々吃々として普通の官吏又は会社員の十層倍以上勤勉努力し、シカモ一篇毎に批評家の粗上の性となる死に物狂ひの辛苦をしながら猶ほ渠等腰弁当の所得に達するが容易ならざる状態であり、「文人美術家が生活に喘ぐは懶惰の爲めでなく又職業選択の我儘からでもなくして、社会が文学美術に盲目であつて其文化史上の位置を認めないからである。」と。

したがって、この時点での有島の発言は当時の文学者の直面していた現実を踏まえたものであったのかもしれない。だからこそ、有島は大正六年の日記に有島武郎著作集第一輯『死』の再版三版が出たことをわざわざ書き記し、八木沢善次宛書簡で「発売后三日で売切れて今再版中です。こんな一ハ夢にも思ひませんでした有難いようにも思ひます痒い様な心持します」（大6・10・22付 推定）と、述べたのではないだろうか。

もっとも、有島が本当に売れなくてもよいと思つて、いわば、企業努力を怠つたというわけではない。それは、新潮社の中根駒十郎に、書簡で「本日書店にて聞く所によれば表紙よこれ易き為め店頭に置くに適せず、蔵の中に仕舞置きて顧客の請求によつて必要なる冊数だけ取出居候由売行きの上に多少の關係有之と存候が表紙の上をパラフィン紙にて包み候ては如何や。」（大6・10・30付）という提案をしていたことから確かめることができる。

自分の本がある程度に売れるかどうかは、彼にとって将来の「生活」を、ということは「思想」をも決する大切なことだったはずだ。

この後、有島武郎著作集をめぐる状況は急激に変化して、著作集を出版した当初の予想とは全く異なった地点へと有島を押し上げることになる。いうまでもなく、著作集が猛烈に売れたことによって引き起こされた変化である。

有島の著作集がよく売れたことは、有島自身の証言でも明らかだ。例えば、第一輯『死』についていえば、発行から三日後に吹田順助宛書簡（大6・10・21付）で、「所謂景気は大分いゝ相です。第一版千三百冊は二日目に売切れて今第二版に取かゝつて居ます」と報告していた。第二輯『宣言』でも日記（『Pocket Diary 1917』12/12の記述によれば、発行後すぐに初版一千部が売り切れたらしく、再版五百部が発行されることになっていた。第六輯『生れ出る悩み』については、原久米太郎宛て書簡（大7・9・18付）に、「発刊後こゝ一週間程三千部は出たさうだ」という記述がある。

こうした著作集の売れ行きは、最大手の元取次であり、小売店としても有力だった東京堂の新刊書のベストセラール・リストによって確かめることができる。大体、半年毎に発表されるリストから有島の著作の順位を抜き出すと以下になる。（4）

大正六年一〜二月……18位『死』（1位秦豊吉訳『若きエルテルの悲み』、17位夏目漱石『明暗』）

七年一〜六月……3位『カインの末裔』、18位『叛逆者』（1位徳富蘆花『新春』）

八年一〇 六月……2位『或女』（前編）、3位『或女』（後編）（1位神田乃武『模範新英和大辞典』）

七〇 一二月……7位『三部曲』（1位『平和条約並議定書』）

九年一〇 六月……2位『惜みなく愛は奪ふ』（1位河上肇『経済思想史論』）、8位島田清次郎『地上』

第二部

七〇 一二月……11位『旅する心』（1位厨川白村『象牙の塔を出て』、7位賀川豊彦『死線を越えて』）

一〇年一〇 六月……4位『小さな灯』（1位倉田百三『愛と認識との出発』）

一一年一〇 六月……2位『星座』第一巻、6位『一房の葡萄』（1位賀川豊彦『太陽を射るもの』、倉

田百三『父の心配』）

七〇 一二月……20位『芸術と生活』（1位『袖珍コンサイズ英和辞典』、2位厨川白村『近代の恋愛

観』）

勿論、東京堂の資料だけでは、当時の複雑な書籍の販売の実体を把握したことにはならないので、有島武郎著作集の奥付、各巻所載の広告、新聞・雑誌に掲載された広告をもとにした増刷の状況を示す表を参考までに示しておきたい。これとても、その実態を明確にするには及ばないが、少なくとも、有島武郎著作集が大正年間を通じて、ベストセラーであると同時にロングセラーであったことだけは明らかにできると思われる。（5）

この予期せぬ出来事に対して、有島はどう反応したのだろうか。

有島武郎著作集の版数

	タイトル・発行年月日	版数／年月
1	『死』（6・10・18）	7・4
2	『宣言』（6・12・18）	7・9
3	『カインの末裔』（7・2・20）	8・3
4	『叛逆者』（7・4・18）	8・12
5	『迷路』（7・6・28）	9・11
6	『生れ出る悩み』（7・9・12）	11・1
7	『小さき者へ』（7・11・9）	11・9
8	『或女（前編）』（8・3・23）	12・11
9	『或女（後編）』（8・6・16）	12・11
10	『三部曲』（8・12・12）	13・1
11	『惜みなく愛は奪ふ』（9・6・5）	13・1
12	『旅する心』（9・11・18）	13・1
13	『小さな灯』（10・4・18）	13・1
14	『星座（第一巻）』（11・5・10）	13・1
15	『芸術と生活』（11・9・12）	13・1
16	『ドモ又の死』（12・11・20）	13・1

◎『新潮社一〇〇年図書総目録』（平8・10刊）には、有島武郎著作集は「二輯毎に人気が昂まり、大正末までに第一輯『死』は九十七版、第二輯『宣言』百三十版、第四輯『叛逆者』は七十五版の増刷を重ねる。」とある。

2

当然のことながら、この事態は有島にとって△喜び▽であつた。有島は、スイス在住のマティルデ・ヘック宛書簡で、自分の文学的成功を誇らしげに伝えている。大正八年に送られた書簡の中から引用してみよう。「僕の方とは言えば、一生懸命文学の執筆の仕事をしています。すでに七冊が出版されており、それぞれが十版以上になりました。これは日本の本としてはまれな成功と言わなければなりません。」（1・15付 原文は英文。筑摩書房版の全集第十四巻所載の訳文による。以下も同じ。）と述べていたのが、二カ月後の書簡では「僕の本（今までに七冊が出ましたは賞讃と励ましとを受け、特に若い世代の人々に迎えられています。何冊かは約一万部売れました。これは日本の出版界ではむしろまれなことです。」（3・15付）となり、六カ月後の書簡では「本当に僕に共鳴し、僕を支持してくれる読者を得つつあります。すでに三万人くらいいるでしょう。これはお国ではそれほど大した数ではないかもしれませんが。しかし日本の読書界ではかなりの数とみなされるのです。僕はこのように多くの読者をもって少しは仕事ができると思います。」（9・26付）とまで述べていて、しだいにオーバーな表現になっていくことがわかる。

マティルデが日本に居住せず、日本人ではないために、有島が思わず誇張や潤色をしている可能性もなきにしもあらずだが、例えば、『生れ出る悩み』の場合、大正八年三月の時点で一七版、当時、増刷は一回につき五百が慣例なので単純計算でいけば、一万部近く発行されたことがわかる。また、著作集を買ったであろう人を延べ人数で考えてみれば、三万人という読者数も全くの無根拠というわけではないかもしれない。しかし、いずれに

せよ、著作集を刊行し始めた時点の、「私のものを読んで下さる方がさう沢山あらうとは思はれません」、或いは「私の作物はどう考へても広い需用を受け得べき性質のものではありません」という予想が全くはずれてしまったのである。これでは第一輯の読者へのメッセージは、ただの偽善的なポーズへと変貌してしまう恐れも出てくる。私の知る限りでは、このメッセージは第七輯『小さき者へ』から二番目と三番目の項目が削られて二項目になつて掲載されることになった。

しかし、有島をとりまく状況はそうした字句の削除でおさまる事態ではなくなつていった。問題なのは、有島が、今や、一線を画そうとしていた、出版コマリシャリズムの渦中にまきこまれ、その中心的な存在になつてしまったことである。彼はもつとも高い商品価値を持った作家になつてしまったのだ。その結果、理想と現実、自己像と他者の抱くイメージとのズレは、有島に、△戸惑い△、△失望△、△怒り△などの感情を否応無く、惹き起こさせた。例えば、彼は、親友森本厚吉が、有島との共著である『リビングストーン伝』の重版の序文の中で、有島を「近時文壇ノ一寵児」⁽⁶⁾と呼んだとき、彼は次のような書簡を送つた。

兄之序文にも大体に於て私から申出る不服はありません

兄が何処までも青年時代ニ形作られた信仰の上に安住されてゐる事を私ハ尊く思ひ嬉しく思ひます。唯私の立場及び信仰の変化について云々して下さつた中に「近時文壇の一寵児」といふ言葉がありますあの寵児といふ言葉ハ本当をいふと私の大嫌ひな言葉の一つです。私ハたしかに寵児には違ひありません。然し寵児といふ言葉ハ世の中の評判といふものだけをそのまゝ受取つてその人を言ひ現ハした言葉です。世の中の評判

といふものがあてにならないものなうハ勿論です。私の真価を——もしありとすれバ——本当に認めてくれる人ハあんな内容の空虚な言葉で私を呼びかけてハくれない筈だと私は兼々思つてゐました。それが兄の筆から見やうとするのハ一寸苦痛です。兄が成功と云ハれた言葉も世俗的な意味での成功のやうに私には読めました。その成功を兄から希望されてゐるのも私には物足りませんでした。兄の原稿の下書きがあるならあの辺をもう一度読み直していただきたいと思ひます。ある読者によつてはあの文から兄を不愉快に感ずる人がありハしまいかとも思ふので一寸申します。（大8・4・15付）

親友が「寵児」という言葉を使ったことにショックを受けての訂正の申し込みだが、「大体」「不服」はないといいつつ抗議をしたり、自分は「寵児」であると認めながら「本当に認めてくれる人」は使わないはずだという理屈、そして架空の「読者」までを引き合いに出してくるところなどから、親友にいわばハ商品として見られた／＼という失望感の大きさが伝わってくる。

友人たちとの交際や友情と、商品としての価値が高くなった自分との間に発生するジレンマは、序文、跋文、或いは原稿を推薦することなどを頼まれたときにも発生した。有島の文章がつくこと——お墨付きをいただくことは、明らかにその本や原稿の商品価値を高めることだった。菊池寛は皮肉まじりではあるが、有島の力をこう認めていた。

余の如き推薦難を嘆じつゝある者に取つて、最も羨しく感ぜらるゝは、有島武郎氏の推薦能力の偉大なる

ことなり。「雑誌には一切執筆せず」と宣言せし、従つて雑誌には、何等の恩をも施すことなき筈の有島氏の推薦にして、屢々成功し、年中雑誌に対する奉公に、忠実なる我等の推薦にして、失敗するは、我々の人徳の同氏に及ばざること遠きが為ならんも、いさゝか羨望の感なくんば非ず。たゞ氏が、推薦にかゝる作品にして、未だ我等を首肯せしむるの佳作なきを恨みとするのみ。（『文壇春秋』『新潮』大10・4）

そんな中で、有島は、自分を巻き込んで展開するコマーシャルリズムと、何とか距離を取ろうと試みてもいる。例えば、堺利彦訳の『野生の呼声』（大8・5刊）の「あとがき」では、戯文めいた調子を出して斜に構えてみせている。「堺君は私に長い文を書いて添へると云つて下さる。堺君は無道德的唯物主義者を以て自ら任じて居れるので、私が近頃実質以上に文壇の流行児（！）になつてゐるのに見込みを付けて、少しでもそれを利用して本を沢山売り出さうといふ魂胆なのだ。所が私は『愛』教の盲信者で同時に人道主義者なのださうだから、立ちどころに数万言を連ねて之れに應ずると思ひの外原稿紙六枚で御免を蒙る事にする」。

或いは、友人の末光績が詩集を有島の序文つきで出版しようとしたときには、彼は、末光宛の書簡（大11・9・14付）の中でそれをできるだけ避けようとし、コマーシャルリズムとは別の位相に二人の関係を位置付けようとしていた。

私之序文を付するといふ事についてハどうも私ハまだ腑に落ちかねて居ます。足助の手紙の中にも私が序を書くから売れもするだらうがとうがつてありますが 幸にしてさういふ事がなければ結構だけれどもある

とすればそれは兄之持つて居られるものを私が奪ひ取ることになるので私としてハ寐さめの悪いことです。兄が自費出版で配本でもしようといふ事になれば私ハ自分のよろこびを現ハす為め進んで何でも書かしていたべくでせうか結果が売れ高とか何とかいふ実利問題をも含蓄するやうになると（兄ニさういふ意図の全くないのはわかり切った事だけれども結果がさうなるやうなことになる）兄としても私としても躊躇すべきでハないかと思ひます。余り度々この事にはこたはるやうだけれどももう一度念の為めに申して見ます。

出版が慈善事業でない以上、「実利問題」が「結果」として「含蓄」しないはずはないので、有島のこだわりは実に奇妙といわざるを得ない。この書簡には、親友との関係を「実利問題」から遠ざけ、あくまで「商売氣を離れた友誼的關係」にとどめようとする、有島の△意志▽、或いは△願い▽が働いていると考えるべきだろう。それが如何に難しいことであつたかは、親友の足助が、有島が「序を書くから売れもするだらうがとうがつていたことに端的に現れている。有島の△意志▽とは関わりなく、彼を商品として見る、まなざしは一番の親友にも及んでいたのである。有島は「日記「最後の日記二」（一九三三年）の中でこうばやいていた。

今日は面会日だ。疲れ果てる事だらう。

朝から果して多くの人がやつて来た。其中に二人の朝鮮人、何れも金の欲しい連中、石阪琢三郎と云ふもと学習院之同窓、これは子供専門之百科店を開かうといふ人、佐藤公樹——民族共存協会を起さうといふ人、小作組合の渡辺氏、其他二三、橋浦泰雄、林政雄、林君には貸家に岩瀬君と同宿を承諾す。（中略）午後勝

見及び足助来る。足助は自分でもいつてあるやうに商売の爲めに屢武郎といふものを忘れようとする傾向を見せるやうになつて来た。それを感じると何となく悲しい感じがする。（六月三〇日）

日記の記述によれば、親友の足助もまた、有島のまわりに集まつてくる「金の欲しい連中」と同様に、この頃には有島を友人としてではなく、「商売」の視点から、商品として見る傾向が強まつてきたのであつた。この十日ほど前の六月二一日の日記に、あるエピソードが記されている。有島の家を訪問した足助は『一房の葡萄はまだ千余出たばかりだとの』感想集を早く出せといふ。創作よりも感想の方が読み答へがある』といったのだ。足助は出版社を経営するものとして、「感想集」の方が売れ行きが良好なので、次回の出版物についての注文を出したというわけである。実際、次に出版されたのは、著作集第一五輯『芸術と生活』（大11・9・12刊）という感想集だった。このとき、有島は三〇日と同様に「少し淋しい気がする。」と記している。

しかし、著作集が売れることは、有島が実行しなくてはならないと考えていた、「生活」の変革、財産放棄をする経済的な基盤を形成することだったはずである。財産放棄をした暁には、彼の「生活」と「思想」を支えるために、著作集の好調な売れ行きと多数の読者の存在が不可欠になるのではなからうか。彼の感傷がどうあれ、「結果が売れ高とか何とかいふ実利問題をも含蓄する」世界を生きなければ、彼の「生活」は成立し得ないのである。こうしたジレンマのただ中で、有島は解決策として、ある選択をすることになった。それは個人雑誌『泉』の発行だった。

3

有島は、大正一一年一〇月の「泉」発行以前から、著作集の出版に際して、個人雑誌に準ずるような試みをしてきた。例えば、有島武郎著作集第八輯『或女』前編の「書後」の冒頭で、「創作を一切他の刊行物に発表しない事にしたので、この著作集はいはゞ私の個人不定期雑誌といふやうな訳になります。で、この輯から私一個の消息をこゝに添へて読者諸君との連絡を取らうと思ひます。」といった発言をし、また、次のように読者に呼びかけていた。

批評家でない純粹の読者から私の作品に対する遠慮のない忠言を伺ひたいと思ひます。創作をする事のみが喜びであり楽しみである一人の作者に取つては、読者からの反響ほど嬉しいものではありません。（後略）

こうした有島の志向が「泉」発行につながっていたのは、「私の作品が評壇から遠ざかつて、読者と直接の關係を結ぶやうな傾向に進みつゝあるのを私としては喜んでゐます。」（「読者と直接の關係」「新潮」大11・12）といった「泉」の発行を前提にした発言や各新聞に掲載された「泉」の広告文からも明らかだろう。「永く懸案としてゐた個人雑誌の発行を私は決意した。他の雑誌新聞に雑多な投稿をするよりも、この方法に拠る方が私の氣分を純一にすることが出来るだらう。何故なら私は私自身の読者にのみ語り得るといふ意識を確實に持つことが出来るから。」（「時事新報」大11・9・13）

無論、既成のジャーナリズムと決別して、コマーシャルリズムと関わりなく「読者と直接の関係」を結ぶということは幻想でしかない。そのことは、「泉」発行の際の、雑誌の流通を握る元取次（大取次）とのトラブルで、露呈していた。足助は「泉」創刊号の「編集余録」でこう述べている。

地方の市場に出ない訳は、この雑誌の販売は、はじめ市内の各大取次店へ交渉したのですが、其内地方行きを専門とする某々取次店では、正味七・四掛以上では相談にならぬといふのです。その理由としては去年までは八掛以上でも引受けてゐたが（こゝで断つて置きますが、僕は相当品位ある雑誌の正味を参照して「泉」の正味を計上したものである）今年からは七・四掛以上は断じて承諾出来ないといふのであります。併し去年と今年とを区別する理由は僕には分かりません。他店は知らず七・三や七・四掛では僕にはとても仕事が出来ないのであります。僕は、大正七年九月にはじめて出版業に従事したのですが、紙価丈は其頃に比して听で十銭乃至十一銭位安くなりました。併し組版印刷代、広告料、製本代等凡て大正九年の最高価格（広告料は其後更に昂騰）を維持し、實に大正七年の秋に比し倍額以上騰貴のまゝであります。

或取次業者は「有島さんのものを三十二頁で二十銭では安い。余り安くては有島さんの顔にかゝるから、定価を二十五銭とすれば七・三掛にしても引合ふでせう」と忠告して呉れました。成程これは大取次業者には至極便利なことだと感心しましたが、読者には至極迷惑なことでありませう。又定価の多少位で潰れるほど安価な顔の持主でも有島はない筈です。僕にしても無法な定価をつけることは、安んぜざる所です。だから僕は彼等を無視して取引せぬことにした為、此雑誌が地方へ出ない事になったのです。

足助が訴えているのは、元取次の横暴さであるが、同時に彼らの存在がなければ、読者のもとに雑誌は届かないという現実が明らかにされている。そのことは、第一巻第二号（大11・11）から「少し地方へ出せる様になつたことですぐに証明される。それは「取引」のなかつた元取次が「泉」を扱うようになったからである。第二号から東海堂、北隆館が、第三号（大11・12）からは東京堂が奥付に記載されていた。足助は元取次が態度を急変させた理由を明らかにしていないが、恐らく、雑誌が売れたため、商売になると判断したのではないかと推測される。この点は、足助が「泉」の発行部数について、「創刊号から第二巻第一号までの印刷部数一万一千、二月号から毎月一千部ずつ増刷、五月六月共に一万五千、若し七月号が出るのだつたら一万六千部を刷る筈であつた。」（「僕に取りての有島武郎」「明星」大12・9）と述べているところから、ほぼ確実と思われる。

このように、有島がいくら距離を置こうとしても、コマーシャルイズムの支配力は商品価値の高い彼についてまわつた。その意味で、「泉」創刊号に掲載された「ドモ又の死」という戯曲が実に興味深い作品であることがわかつてくる。この戯曲のストーリーは、芸術に燃える貧しい青年画家たちが、芸術活動の資金を得るために、仲間一人を夭折した若き天才画家にしたてあげて、芸術を金銭取引の対象としてしか見ない、「悪ブローカー」九頭竜や大金持ちの「似非美術保護者」堂脇をペテンにかけて、金をだましとろうとするものである。つまり、芸術家がコマーシャルイズムに対してへ勝利する√ことに戯曲の眼目がある。劇中には、次のような対話もある。

青島——（前略）つまり堂脇のぢい、いが僕達の運命をすっかり狂はしてしまつたんだよ……（中略）……他

人の運命を狂はした罪科に対して、堂脇は存分に罰せらるべきだよ。

沢本——さうだとも。何しろ彼奴の金力が美の標準を目茶苦茶にするために使はれてゐたんだ。そのために俺れ達は三度のものも食へない程に飢ゑてしまふんだ。（中略）ドモ又の命が買ひもどせる位の罰金を出させなけりや、俺れ達の腹の虫は納らないや。

戯曲のラストシーンから見ても、「能ふかぎりの罰金を支払はせること」と「その為めには日頃の馬鹿正直を抛つて、巧みに権謀術数を用ゆることを誓」つた若き芸術家たちが堂脇たちからうまく金銭を詐取し得たのは確実である。また、そのように読むのが有島の意図に即した読みと考えられる。なぜなら、有島は「戯曲（喜劇）を書きながら独りで笑つてゐます」（唐沢秀子宛書簡 大11・8・6付）、「喜劇を一つ作りました。それが乗ります。偶には人間も笑つて見たくなるものです。多分相当に笑へるだらうと思ひます。」（浅井三井宛書簡 大11・8・10）といった書簡を残しているからである。恐らく、彼が笑いながら執筆していたというのも、彼自身が苦しめられているコマーシャルイズムに、青年画家たちが、ハ勝つVというストーリーにある種のカタルシスを感じていたためではあるまいか。「ドモ又の死」が個人雑誌「泉」の創刊号に掲載された意味もそこにあつたといえるだろう。しかし、果たして、有島の意図通りに「ドモ又の死」を喜劇と見なすことができるだろうか。青年芸術家たちが、たとえば、この場合はハ勝利Vを収めたとしても、結局、コマーシャルイズムそのものを否定したわけではなく、むしろそれに寄生しているに過ぎない。ドモ又の作品が商品価値を持ったのも、俗物である堂脇たちが信じていた、天才は夭折するという通俗的な物語を利用したからである。また、有島が「ドモ又の死」の「暗示」を得た

ことを明らかにしている「マーク・トウェインの小話」、「Is he living or Is he dead?」⁽²⁾は、フランソワ・ミレーを題材としたもので、ストーリーとしては「ドモ又の死」とほぼ同じなのだが、この作品では芸術家の入勝利ではなく、コマーシャルイズムに左右される芸術家の姿やジャーナリズムによって芸術作品の価値が決定されてしまうことなどが風刺的に描かれていた。つまり、有島はマーク・トウェインの作品の中心にある芸術に対する風刺を切り捨てて戯曲化しようとしたのである。

しかし、書かれた直後から、すでにこの戯曲は喜劇ではなく、悲劇ではないのかという疑念の声はあがっていた。有島が切り捨てたはずの風刺性は空白として読み取ることが可能だったのである。そのことを最初に指摘したのは、最初の読者であった足助だった。「ドモ又の死」の原稿を大正一一年八月二三日に軽井沢で受け取った足助はその際、「この喜劇には攪りがあるから喜劇かも知れぬが、読んで行けば立派な現代の悲劇ぢやないか」〔有島氏の生前と死後〕（四）「読売新聞」大12・8・4と有島に述べていた。また、大正一一年一二月二三日の試演を見た小林宗吉・小村欣一の劇評によれば、「本来芸術に対して、あくまで真摯であり、神聖であるべき芸術家が、食ふ為に芸術家らしい良心を忘れて、作品を瀆し、作品を捨て、果は芸術など、といふものや食ふことはさておいて、モデルの女を得ることの方が大事なことになるてゆくやうなデイスイリジョンメントを書いたものであらうと思ふ。」〔『報知』劇研究会と『ドモ又の死』〕「報知新聞」大11・12・24とある。

「ドモ又の死」は、コマーシャルイズムに搦め捕られた芸術家の姿を描いているとも読むことができるのである。⁽³⁾しかし、そうした視点を、有島は己の理想主義的なまなざしから排除していたというべきだろう。しかも、有島は、財産放棄をしていたら、いづれ見えずさるを得ない、この視点について立たないまま死んでしまった。

4

足助の「淋しい事実」（『泉 大12・8』）によれば、情死の相手の波多野秋子の夫春房は有島に「それほどお前の氣に入つた秋子なら喜んで進上しよう。併し俺は商人だ。商売人といふものは物品を只で提供しはしない。秋子は已に十一年間も妻として扶養したし、その前にも三四年間引取つて教育したのだから、ただでは引渡せない。代金をよこせ」と直接迫り、また秋子を通して「波多野は一万円欲しいんださうだから告訴しないことにきめた」と込んでやるんだが、文士などいふものは監獄に行くとい層著名になるさうだから告訴しないことにきめた」と脅迫した。これらに対する有島の答えは、「自分の生命がけで愛してゐる女を、僕は金に換算する屈辱を忍び得ない」、「孰れにせよ、僕は愛する女を金に換算する要求には断じて応ぜられない」、「僕は甘んじて監獄へ行くよ。どう考へても愛するものを金で評価する屈辱には堪へない……。」というものである。

これらの答えは、脅迫に対する△愛▽の名の下の拒否という以上に、彼を苦しめてきた、この先も苦痛を与え続けるだろうコマーシャルイズムに対する態度決定とも読むことができる。「人間およびその環境が交換の支配下に置かれ、作家と読者の関係も含めあらゆる取り引きが金銭取り引きに変わってしまった」△市場社会▽の中で、有島はそれに従うことを結果として拒んだともいえるのだ。そして、その答えが余りに決定的なのは、「監獄」ではなく、△死▽が選ばれたからである。また、△死▽以外に彼の△理想▽の現実性を確保することのできるものは存在していなかったといつてよいだろう。（9）

興味深いのは、前年には、有島を商品として見ようとしていた足助も有島の選択に同調するような言動をとったことである。「僕に取り立ての有島武郎」によれば、二万三千部刷った「泉」の終刊号が「即日売切れ」、「内外共に再版印刷を」「迫った」時、足助はそれを拒絶するが、その時に述べた言葉が近藤憲二の回想の中に残されていた。「叢文閣へ行つてゐると、東京堂から電話がかゝつて来て、終刊号が売切れになったからも少し寄越せといふ注文であつた。足助さんは電話口で『もう無い』と云つてゐた。ところが先方で『再版したらどうか』とでも云つたのであらう。／『死んだ友達で金儲けするのは嫌やだ』／彼はさう答へてゐた。（『鰯のやうな男』足助素一集』昭6・10刊 ただし、引用は、平成五年六月刊の湖北社の「近代日本学芸資料叢書」第十六輯による。）

この発言に、有島の選択と共通するものがあることは、一目瞭然であろう。足助は、有島の死後、親友の遺志を継いで、「友誼的関係」を優先させたのである。しかし、△死△は、彼らの思いとは関係なく、有島自身と彼の作品の商品価値を益々高めていくことになった。まさに「ドモ又の死」は有島の作品の死後の運命を先取りしていたのである。「読売新聞」の記事にはこうある。

（前略）有島氏の死が本屋さんをもうけさせたことはそれはく大したものだ——例の叢文閣の有島氏個人雑誌「泉」の終刊号が即日売切れとなつてしまつたことは既に知られてゐる事実だがその他七月号で他の雑誌を出し抜いて有島問題を書せた女性改造有島氏の情死の相手波多野秋子さんが勤めてゐた婦人公論などの売行も見逃がせない。何でも噂によれば両方とも平常の発行部数の倍を突破して十数万部など、いはれてゐるが、或ひはこの数は当らぬとしても、兎に角女性改造の方は初版が二三日で売切れ、再版も一週間ぐらゐで

全く品切れとなつてしまひ、追つかけて三版をと思つたが少し時期が過ぎたといふので中止したといふこと、婦人公論の方は予め売行きを見越していつもの倍数を刷つたのがこれもまた二三日で市内の小売店から全く影をかくしてしまつたといふことだけは事実である。それから氏の著作集十五冊であるが、その中新潮社から発行されてゐる「死」「宣言」「カインの末裔」「反逆者」「迷路」の五冊と叢文閣からの「生れ出づる悩み」「小さき者へ」「或女」上下「三部曲」「惜みなく愛は奪ふ」「旅する心」「小さな灯」「星座」「芸術と生活」の十冊ともに何れも氏の死後発行部数が激増しその中で新潮社からの分では「死」が第一で氏の生前までは五十版であつたのが現在は六十七版つまり纔な間に十七版を重ねたわけだが、その他のものとても死後何れも十版以上にならぬものはない。それから叢文閣のものもこれに劣らぬ景気で、その中で一番素晴らしいのは「惜みなく愛は奪ふ」で死後五六千部、その次は「生れ出づる悩み」と「或女」で各二三千部その他のものとても何れも一千部以上の増版をしてゐるそれから近く発行される「有島武郎全集」であるがこれもきつと予約出版のレコードを破るものとなるだらうとは黒人筋では何れも睨んでゐる（死んで本屋を儲けさせた有島武郎氏） 大12・8・13

この記事の予測通り、翌年から募集が始まった「有島武郎全集」は、関東大震災という大打撃を被つた後にも関わらず、「予約出版のレコードを破る」ことになった。「読売新聞」の記事によれば、「締切後旬日にもならないので申込の完たい調査は未だ出来てゐないが七千部は確実に突破し約八千部と称しても差支なからうといふ量には『漱石全集』初版五千部『鴉外全集』の六千部が当時の驚くべき新記録とされたのに較べて尚千数百部を凌

駕してゐる」（『有島全集』 予約の成績？） 大13・3・10、或いは「総申込八千八百何部とは全く奇蹟のやうな夢のやうな話のやうな話だがそれで故人の遺児に献げる印税九万七千六百余円は正しくピーンと音する正貨だ」（『書架の前 大13・3・31』とあった。こうしたゴシップが満更嘘でもなかったことは、足助の、茂木由于宛書簡（大13・3・8付）に、「案ずるよりは生むが安く、有島全集も八千部近き申込みあり。子供達への印税も七万円以上やれます。即ち故人の五万円（大正九年頃子供達へ残すといつた 僕等の十万円残すべしとした丁度中間の金額が子供達の所得となるのは大に嬉しいことです。」（『足助素一集』）とあることから確かめられる。

作者の手から離れた有島の作品の運命は一体どのようなものになるのだろうか。

大正一三年六月、新潮社は、有島の人気を当て込んで、代表的名作選集の中に、「生れ出づる悩み」「小さき者へ」「ドモ又の死」を収めた『生れ出づる悩み』を出版しようとした。この出版が、有島が著作集刊行時から表明していた、「二度の勤」をさせないという方針に抵触することは明らかだった。当然、足助は、この事態を避けるために交渉するのだが、結局、『生れ出づる悩み』から『泉谷集』と題名を変えただけで出版は強行されることになった。それに対して、足助は「読売新聞」と『東京朝日新聞』に『生れ出づる悩み』の二重出版の顛末と其の帰結（大13・6・28）という広告を出して、事件の経過を説明しながら抗議した。彼は「二重出版」が「故人の意志に反するもの」である根拠を様々に述べ、新潮社と新潮社の要求を承認した有島生馬を批判した上で、自分が如何に良心的に交渉を重ねたかを明らかにしている。「二重出版」が強行される現実を前にして、足助は「事茲に立ち至れる以上最早自分としては、遺児の後見人たるものゝ人格を信頼し、安んじて出版を継続することは不可能なりと信ずるが故に、自分は武郎兄の友人としては彼れの意志を実現せしむることを得ず、出版

者としては自己の権利を維持する能はざるものと覚悟せざるを得ざるに至つた。仍つて自分は最早かゝる人格と何等かの交渉をも有つことを潔しとせず、その当然の帰結として、当叢文閣発行に係る」全ての版權^⑩を放棄してしまつた。彼はそうせざるを得なかつた自分の心情について訴えている。

わが叢文閣から発行せる有島武郎氏の著作物、就中その『著作集』は、亡友が自分に残して呉れた何ものにも代へ難き唯一の記念品であつた。その宝玉が見すく汚されるのを防ぎ得ない無力の自分を痛感しては、涙を吞んで、これに訣別を告げる外はないのである。

無論、この涙の訴えも、新潮社の前には効果を持たなかつた。有島生馬はすぐに「亡兄の著作に就て」（『東京朝日新聞』大13・6・29、7・1、2、3）という反論を出し、新潮社は、六月三〇日の「読売新聞」に掲載された「新潮社週報」で、生馬の文章を引用しながら、『泉谷集』の出版を正当化した。そこでは、足助の言動が「病余の神経作用によるもの」だと示唆され、「二重出版」を問題とする必要がないことが述べられていた。

◆……足助氏が二重出版云々と云ひ之を決定的の罪惡のやうに書いてゐるがこの点が主要である。然しもし文壇の事情を知つてゐる人ならば、二重出版云々は決して問題にならない問題なので、今日の作者で一人として、この二重出版をしてゐない人はないのであり、又どの出版者も公然之を認めてゐる事である。之を問題にするのは足助氏一人である。

有島の意志を無視した発言に、足助は反発し生馬との間で激しい応酬があった。⁽¹⁾「二重出版」についても文壇ジャーナリズムの間で一応は問題となる⁽²⁾が、新潮社は、何事もなかったように大正一四年に叢文閣が放棄した有島武郎著作集を発行した。そして、足助が見放した、有島の作品はますます「汚され」ていくことになった。

その端的な証しは、昭和一四年までに出版された全集の数である。叢文閣の『有島武郎全集』全一二巻（大13～14）に始まり、新潮社の全一〇巻（昭4～5）とその略装版の全集（昭6～）⁽³⁾、改造社の全三巻（昭6）、春陽堂の文庫判の『有島武郎小全集』全一二巻（昭8）、新潮社の『解説有島武郎創作全集』全六巻（昭14）と、一五年ほどの間で六回も全集が発行されるという事態になった。このことは、有島の作品の商品価値が如何に高かったかを証明すると同時に、有島の作品の運命が如何に有島の意図から遠く離れたものになったかを我々に伝えてくれている。

△市場社会△によって商品として消費し尽くされた有島の作品の辿った道の険しさは、本多秋五の「有島武郎論」〔『白樺』派の文学〕昭29・7刊の巻頭に示された「古本屋の主人」の、「有島全集、あればいちばん値の安い全集です。さやう、戦争中この方のことですね。」という言葉に象徴されている。

注

（1） 拙稿「大正九年、出版ビジネスは△文学△を自律させた——「読売新聞」コラム「読書界と出版界」から——」（『学習

院大学文学部研究年報」第43輯 平9・3）を参照されたい。

（2） 拙稿「大正六年——文壇のパラダイム・チェンジ」（『学習院大学文学部研究年報』第41輯 平7・3）を参照されたい。

（3） 叢文閣に第六輯以降の著作集の出版権を譲渡した新潮社のビジネス戦略は、「著作集以外に出版物の御準備があたりですか。叢書物が売れるのは五六輯までで、後は下り坂になるばかりです。独歩叢書すらがさうです。」（足助素一「有島生馬氏の『亡兄の著作に就て』を讀みて」 注11を参照）という、足助に対して述べられた佐藤義亮の忠告に集約されていたと思われる。その上、有島はいわば印税も放棄しているので、すべてを「友誼的關係」に回収するのは無理があったはずだ。

（4） このリストは、『新刊図書雑誌月報』の「昨年度発行のよく売れた新刊書」（大7・1）、「上半期発行の売行よき新刊書」（大7・7、8・2）、「よく売れた新刊書」（大10・7、12・1）、「読売新聞」コラム「読書界と出版界」の「高

いが売れる」（大9・3・14）、「上半期の好著 東京堂調査」（同7・4）、「本年の出版界」（同12・19）、「本年上半期の新刊売高競べ」（大11・7・31）に基づいて作成した。

（5） 有島の著作集は有島の生前の六年ほどの間に少なくとも三〇万部は発行されていたと考えられる。この部数のすごさは、

例えば、夏目漱石の著作の売れ行きと比較して見るとよくわかるだろう。松岡譲の『漱石の印税帳』（昭30・8刊）には、

漱石生前の書籍の発行の状況が分析されている。例えば、春陽堂発行でいえば、大正五年までに、『虞美人草』が、八五〇〇、

『三四郎』が四六〇〇、『それから』が三三八〇、『門』が二七〇〇部発行されたことになっている。また、新潮社が

大正三年に発行した『坊っちゃん』は、一二九〇〇部とある。こうした事実をふまえ、松岡は、『猫』の上巻が出てから没年の大正五年までの十二年間の総計が約十萬冊だとすると、年間平均一萬冊にも足りないのである。これが当時の文界の最高位に君臨して、特別扱ひをうけて居た人気作家の実体なのだから、いかにその頃の読書界といふものが狭かつたかがよくわかる。文士といへば貧乏と同義語だったわけも読めるといふものだ。」と分析している。

（6） 森本厚吉の『リビングストーン』第五版（大8・10刊）に寄せた「重版自序」の該当部分はこちらだ。「有島君が近時文壇ノ一寵児トシテ数万ノ読者カラ敬慕サレル様ニナツタコトヲ非常ニ愉快に感ズル。君ノ成効ガ益々大ナランコトヲ衷心忻ルノデアル。勿論君ハ普通文士ノ有シテ居ナイ貴イ修養ヲ盛ニ積ンデ居ルノデアルカラ、君ノ成効ハ当然ノ結果デアル」。

（7） さらに、両者の関係については、太田三郎「マーク・トウェインと有島武郎」（『学苑』昭37・4）、鈴木幸枝子「有島武郎『ドモ又の死』の文体と構成」（『実践国文学』昭59・10）などが比較文学的な観点から論じている。

(8) 学習院大学での授業における、小切間佐穂の指摘によれば、この作品の構成上の矛盾は、堂脇と九頭竜に会いにいった花田と青島は夭折した天才になれないという点にある。つまり、沢本・ドモ又・瀬古の三人しか、その役割を引き受けられないので、彼らは花田たちのペテンにかかったとみることができてしまうのである。

(9) 有島の自殺の原因は様々な要因が考えられるので、この問題に特定できるわけではないことに注意されたい。

(10) 足助は、『有島武郎著作集』第六集より第十六集、『ホ井ツトマン詩集』、『一房の葡萄』については即時、出版権を放棄し、紙型を有島の遺児に贈呈し、『有島武郎全集』は全集刊行完結後に同様に出版権を放棄し、紙型を遺児に贈呈すると宣言した。

(11) 論争は、足助が「有島生馬氏の『亡兄の著作に就て』を読みて」（『東京朝日新聞』大13・7・6、8、9）を、生馬が「敵を選め」（同、7・9）を、それに対して、足助が「止めを刺す」（同、7・13）という具合に続いた。

(12) 菊池寛が「文壇の立場から」（『東京朝日新聞』大13・7・4）、「文芸当座帳」（『文芸春秋』大13・8）などで言及し、「読売新聞」には、長谷川巳之吉の「二重出版を論じ著作及出版者に警告す」上下（大13・7・10、11）、「晴雨計」（8・9、8・22）といった記事が掲載された。

(13) 現時点で論者はこの全集の発行状況を把握できていない。なお、『新潮社一〇〇年図書総目録』（平8・10刊）によれば、第三、八、九、十巻は「未確認」とある。

なお、本稿は、平成八年一二月七日にフェリス女学院大学でおこなわれた有島研究会での発表に基づいた論文である。

（日本語日本文学科 助教授）

有島武郎――〈市場社会〉の中の作家（山本）